

鳶 伝統文化の由来

梯子のり（ハシゴのり）

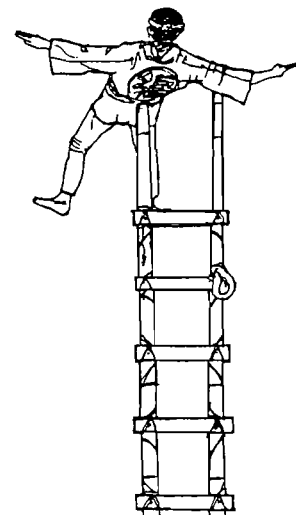
本来は、仕事するための準備運動として鳶職がハシゴに乗った。鳶職は高所の作業をするため身軽でなければ務まらず、また、度胸がなければ出来ないので、ハシゴ乗りで身のこなし方と度胸をつけ、一人前の鳶職として活躍できるよう訓練した。

ハシゴ乗りを初めて行ったのは、昔江戸に在住していた「加賀鳶」だという。加賀鳶は前田藩に所属し、本郷の加賀屋敷（現東大の位置）につかえ、加賀藩に課せられた「大名火消」の任務を担当すると共に自邸の消化の任にあった。

火消しが勇猛果敢に自分の身を挺して火災現場に立ち向かい、梁の上に生命を託したのがその火消仲間が訓練で行ったのもハシゴ乗りでもある。

ある時、江戸上野、池の端附近から出火したとの報せに出勤し、現場についたが一向に火の手が見えない。そこで持参したハシゴ（約6.6メートル）を立て、急場の「火の見櫓」の代用に附近を見渡したが火の手が見えないので、「出火は誤りである」と報告したところ、「もう一度よく確かめろ」と言われ、灰吹き（ハシゴの先端）のところまで登り足を竹に支えて、小手をかざして、あたかも高見の見物をするような格好をした。それが後に「遠見」という芸の原点になった。

町火消と違い、大名抱えの「火消専門職」ともなれば火事がなければ暇を持て余し、ハシゴを「玩具」に、いろいろな技開発して多くの種類の芸がある。ハシゴの一番上で行う芸と途中で行う芸に大別され、両方の組合せや応用でいろいろの演技の型を生み出している。



鳶伝統文化の由来

梯子のり（ハシゴのり）

本来は、仕事するための準備運動として鳶職がハシゴに乗った。鳶職は高所の作業をするため身軽でなければ務まらず、また、度胸がなければ出来ないので、ハシゴ乗りで身のこなし方と度胸をつけ、一人前の鳶職として活躍できるよう訓練した。

ハシゴ乗りを初めて行ったのは、昔江戸に在住していた「加賀鳶」だという。加賀鳶は前田藩に所属し、本郷の加賀屋敷（現東大の位置）につかえ、加賀藩に課せられた「大名火消」の任務を担当すると共に自邸の消化の任にあった。

火消しが勇猛果敢に自分の身を挺して火災現場に立ち向かい、梁の上に生命を託したのがその火消仲間が訓練で行ったのもハシゴ乗りでもある。

ある時、江戸上野、池の端附近から出火したとの報せに出勤し、現場についたが一向に火の手が見えない。そこで持参したハシゴ（約6.6メートル）を立て、急場の「火の見櫓」の代用に附近を見渡したが火の手が見えないので、「出火は誤りである」と報告したところ、「もう一度よく確かめろ」と言われ、灰吹き（ハシゴの先端）のところまで登り足を竹に支えて、小手をかざして、あたかも高見の見物をするような格好をした。それが後に「遠見」という芸の原点になった。

町火消と違い、大名抱えの「火消専門職」ともなれば火事がなければ暇を持て余し、ハシゴを「玩具」に、いろいろな技開発して多くの種類の芸がある。ハシゴの一番上で行う芸と途中で行う芸に大別され、両方の組合せや応用でいろいろの演技の型を生み出している。

